

## 中国サマーセミナーの成果と可能性についての一考察

### — 2015年度 新潟大学清華大学サマーセミナー アンケート調査 報告書 —

#### A Survey Report of the 2015 Summer Seminar at Tsinghua University

干野 真一・真水 康樹

---

2015年8月8日至9月6日，新潟大学学生进行了清华大学短期研修。本稿以过去的问卷调查为根据，对这次研修的问卷调查进行了整理总结。

这个研修始于1994年清华大学人文社会科学学院和新潟大学法学部之间的新潟大学夏季短期班。清华大学和新潟大学的这个活动到现在已经是第22次了。1994年到现在，参加这个项目的学生已经达到380人。这期间没有发生过任何事故。

---

#### 目次

はじめに .....	23
第1部 事前アンケート .....	25
第2部 事後アンケート .....	27
第3部 追跡アンケート .....	32
むすび .....	35

#### はじめに

2015年8月8日から9月6日まで、新潟大学の学生を対象とした清華大学サマーセミナー（以下、「サマセミ」と略称する場合もある。）が実施された。本稿は今回のサマーセミナー参加学生へのアンケートについて、過去に実施されたアンケート結果<sup>(注1)</sup>も踏まえて、考察したものである。前回のアンケート考察が2010年度実施分に対するものであり、今回はその5年後の定点観測という意味合いを持つ。清華大学・新潟大学共催の本プログラムは、2015年度で通算22回目の実施である。1994年以来の参加者の累計は、380

---

干野真一：新潟大学 教育・学生支援機構

真水康樹：新潟大学 法学部

人に達し、この間、事故等は一度も生じていない。ここで、この清華大学サマーセミナーの特徴を学習面に限って挙げると次の通りである。

- (1) 1日6時間、全期間合計で90時間の授業時間
- (2) やる気のある者だけのクラス
- (3) 課外時間の有効活用：日本語禁止

中国語圏への夏期集中研修プログラムは、民間のものも含めて数多いが、この3条件を満たすものはおそらく全世界でこの清華大学サマーセミナーだけである。上記(1)、(2)のメニューは、徹底して学習の効率性を重視したもので、毎日6時間の授業時間については中国側の担当者も「中国国内では他に例がない」と言い切るものである。その6時間が、(2)やる気のある学生だけで構成されているのだから、その効果は絶大である。そして(3)もあくまで学習効果を考へての項目であり、サマーセミナーでは食事の時間も含めて、自室以外の全ての場所での「日本語禁止」を徹底している。このため、全員が必ず揃う昼食と夕食のテーブルは、授業「プラス・アルファ」の勉強時間となる。ある程度基礎力のある学生なら、限られた語彙のなかでも、かなりの幅の表現を行えるし、話す場を与えられることで応用力もつく。食事の各テーブルには、必ず上級者が配置されているので、適切なアドバイスも得られる。初心者は初心者で、ヒアリングのトレーニングになるし、語彙も増やすことが出来る。そして、一言も喋れなかった、聞かれていることはわかったのに答えられなかった悔しさは、さらに一層の学習意欲を育てることになるのである。

本プログラムによる教育効果は絶大であり、これまでの累計参加学生数は380名に及び、そのうち、北京大学・清華大学だけで110名以上が、中国への長期留学を実現しており（その他の中国の大学へ留学した学生数も15名程度）、本プログラムへの参加から長期留学に結びつく比率は3分の1以上である。

また、2010年度には、学生からの体験記や、参加人数の変遷、さらには卒業生列伝なども含めた報告書が作成された。<sup>(注2)</sup>

サマーセミナーで実施されているアンケートの概略は次の通り。アンケートは、参加決定時点（事前）、終了後（事後）、約三ヵ月後（追跡）のそれぞれの時点で実施する3種類である。質問項目は、サマセミ開始当初から一貫して同じ内容で実施されてきており、経年変化による分析が可能である。本稿では、紙幅の都合で全てを網羅するわけにはいかないものの、2015年度のアンケートまとめを第一に行い、同時に、過去3回のアンケート総括についても適宜言及する。アンケートは、参加全学生へ統一した質問をしており、客観的指標を基準とする。一方で、回答は多岐に渡り、主観的な要素も色濃く反映したものとなっている。択一式の回答のみならず自由記述の項目も多いため、統計処理に馴染まない点もあるが、概ね、アンケート結果は「学生の満足度」を数値化したものと考えられる。

以下、今回参照するアンケートについて、回答した学生の状況を簡単に紹介しておく。（過去のアンケートの内訳については、干野ら2011を参照されたい。）

■ 2015年度——15名分。（所属別では、法学部4名、経済学部4名、人文学部3名、教育学部2名、医学部1名、農学部1名。学年別では、1年生4名、2年生7名、3年生

2名、4年生2名。男女比は女子11名、男子4名である。)

以下、第1部は、サマーセミナー出発前に実施した「事前アンケート」の結果であり、第2部は、9月の帰国後に実施した「事後アンケート」、さらに、第3部の内容をなす「追跡アンケート」は12月に実施されたものである。コメントの引用末に付した「(M)」は男子学生からのコメントを、「(F)」は女子学生からのコメントであることを表す。

### 第1部 事前アンケート (全13項目)

Q1. サマーセミナーの存在をいつ知りましたか?      1、入学前      2、入学後  
 Q2. サマーセミナーの存在をどうして知りましたか?

(2015年度)「入学前」2名、「入学後」13名であり、後者が圧倒的に多くなっている。「入学後」の具体的な時期としては4月～5月に集中しており、新入生ガイダンスや年度初めの広報活動が効果的に作用していることが確認された。Q2について、パンフレット以外の情報源としては、先生、先輩・友人である。

年度 \ 時期	入学前	入学後
2000	17 (71%)	7 (29%)
2006	7 (44%)	9 (56%)
2010	9 (36%)	16 (64%)
2015	2 (13%)	13 (87%)

Q3. サマーセミナーに行く決意をしたのはいつですか?

全般的な傾向として、サマーセミナーの存在を知って興味を持ち、4、5月の事前説明会に参加して学生本人の意思が固まり、家族に了承を得て、参加を表明する、という者が多い。事前説明会では、過去の写真等を交えながら出来る限り具体的に紹介を行っている。

Q4. サマーセミナーに行くのは何回目ですか? 中国以外も含めて、教えてください。

カナダへのプログラムに参加経験のある1名を除いて、14名が初めてという回答であった。2010年度も25名中24名が初参加であり、セミナーに初参加の者が多いことから、近年の傾向として、学生らが短期研修参加に慎重な姿勢であることが分かる。

Q5. サマーセミナーに何を一番期待していますか?

ほぼ全員が「中国語力の向上」を挙げた。また「中国の真の姿を知りたい」、「海外体験」、といった回答もあり、過去を振り返ってもほぼ同様の結果である。本プログラムの最大の趣旨を参加者が理解し、目的意識として顕れている。

**Q 6. 勉強面で不安はありますか？それはどんな不安ですか？**

この項目も全員が「中国語を聞きとれるか・授業についていけるか」を挙げており、「不安なし」と答えた学生はいなかった。

**Q 7. 勉強以外の面で不安はありますか？それはどんな不安ですか？**

過去のデータでは、健康や体調といった学生本人に関わるものが最多だったが、今回は、「環境・衛生・治安」といった現地事情に関する不安が上回る結果となった。

**Q 8. 日本語禁止の方針についてどう思いますか？疑問や反対意見も書いて下さい。**

これまでの傾向と変わらず「苦労はすると思うが効果的」と考える学生が多いようである。本ルールは初回以来の「伝統」であり、結果として「やる気のある者だけ」が参加することにつながっている。

**Q 9. 日本語禁止も含めて、部屋でもできるだけ中国語を使うよう心がける等、自分で中国語を身につける環境を意識的に維持できると思いますか？**

前項目と同様に、全員が「できる・努力する」と答えた。

**Q 10. サマーセミナー参加費は誰が負担しますか？或いは負担割合はどの程度ですか？**

過去の統計では、以下の通りであった。2000年度は、全額保護者14名、全額自己負担7名、分担3名。2006年度は全額保護者が10名、全額自己負担は2名、将来の返還が2名、半々の分担が2名。2010年度は、全額保護者が14名、全額自己負担が3名、将来の返還が4名、分担4名。

2015年度は、全額保護者5名、全額自己負担3名、将来の返還2名、分担5名である。従来に比べ、全額を保護者が負担するという割合が減り、自分自身で工面する傾向が高まっている。「自己負担であるか否かと、やる気の間には相関関係はないように思われる。」(2006年度の報告より)という傾向は本年度も当てはまる。ただし、サマセミ参加という「投資」に対する学習成果について、自分自身およびプログラムへの期待というものは年々、大きくなっているようである。これは、決して過去の参加者の期待値が低かったというわけ

では無く、費用も上がり、海外へ飛び出すのに躊躇う者が多くなっている中、行くからには  
相応の成果を上げたい、という意識が強くなっているように感じられるのである。

Q11. サマーセミナーに参加することについて保護者は好意的でしたか？それとも、  
説得するのに手間取りましたか？反対されたとしたら、それはどのような理由  
でしたか？

ほとんどが好意的に承認してもらえたようである。それに対し、かなり反対されたと答え  
た者の理由として、①現地の環境に対する不安、②中国語より英語を勉強すべき、③費用  
が高い。が挙げられていた。いずれも真つ当なものであり、或いは、サマセミの参加をあき  
らめた者の潜在的な理由の多くもこれらに該当するように思われる。

Q12. 計4回、説明会をやりましたが説明のしかたはどうでしたか？不十分なところ  
や説明の足りなかったところがあったら教えてください。

過去の回答と同様に、「分かりやすい」という回答が多かった。配付プリントによる詳細  
な全体紹介と、現地生活をイメージしやすい写真紹介により、十分な説明会となっているよ  
うである。

## 第2部 事後アンケート(全13項目)

Q1. サマーセミナーの全般的な感想はどうですか？

1、満足 2、まあ満足 3、やや失望 4、失望

過去の記録と併せると、2000年度：「満足」17名、「まあ満足」6名、「やや失望」  
1名（自分自身に対するもの）。2006年度：「満足」12名、「まあ満足」4名。  
2010年度：「満足」22名、「まあ満足」3名。2015年度「満足」13名、「まあ満足」  
2名。となっており、安定して、高い満足を得られるプログラムとなっている。

Q1'. その理由は何ですか？

(2015年度) 以下に、数名分を抜粋して紹介する。

- ・「出発前は一ヵ月に及ぶ滞在に対して不安もあったが、今となっては、この一ヵ月は人生  
で最も有意義な一ヵ月であったと思える。中国の最高学府である清華大学で中国語を学ぶ  
という貴重な経験をすることができたことを誇りに思う。」(M)
- ・「行く前と比べると会話力は確実に上がった。記述力(語彙)もまあ増えた。終盤に受け  
た中検3級の問題も予想以上の点数がとれた。」(F)

- ・「平日の食事の時をはじめ、授業以外でも中国語を使う機会が多かったからです。また、万里の長城や故宮の見学など中国文化にふれる機会も多くあり、中国語だけでなく中国の文化にも興味を持つきっかけになりました。」(F)
- ・「集中的に学ぶことが出来、日本にいたら絶対に実現できない環境で学ぶことが出来たため。」(F)

**Q 2. サマーセミナーで何が一番充実していましたか？**

回答の多かったものから順に挙げると、「授業」5名、「参観活動」5名、「仲間」2名、「小旅行」1名、「食事（食事中の中国語会話）」1名、「現地体験」1名である。過去のデータでは「授業」という回答が最多であったが、今回は「参観活動」も同数となった。

**Q 3. 何が一番の収穫でしたか？（Q 2と同じでも構いません）**

サマーセミナーにより得られる収穫は、学生により異なる。記載内容から判断するに、サマセミでの経験が「次につながるもの」である点が何より有意義である。

- ・「中国語力がついたこと。中国での長期留学のビジョンを構築することができた」(F)
- ・「リスニングの力の伸びを実感できたこと」(F)
- ・「中国の雰囲気や歴史を感じる事が一番の収穫でした。日本で見ると中国人と、現地で見ると中国人は全然違います。中国では我々日本人が外国人なのです。マナーや常識もこちらが合わせなくてはなりません。毎日驚きの連続でした。この経験は、中国に実際行かないとできなかつたと思います。」(F)
- ・「中国に初めて行き、中国の実態をわずかながら知ることができたこと。よりいっそう中国語を学習する意欲が強くなったこと」(M)

**Q 4. 何か嫌なことはありましたか？差し支えなければ教えてくださいませんか？**

「特になし」と答えた者が5名。「嫌なこと」として書かれた内容では、衛生環境（特にシャワー、トイレなど水回り）についての言及が多かった。が、「空気の汚さやトイレの汚さなどには閉口したけれども、さすがに1か月もいると少しは慣れたと思う。」(M) という声も見られた。また、教科書の付録CDがmp3対応であったり、メールやSNSで音声データが配付されたといった個人の学習環境面の整備で不満が出た点は改善を要する。

**Q 5. あなたが期待したものは得られましたか？それは何故ですか？**

中国語学習面での成果を挙げる回答が多く見られた。以下、数名の回答を抜粋する。

- ・「中国語の力を伸ばしたいとサマーセミナーに参加したため、その目標は達成できたと思

う。また、中国の観光地に行ったり、文化や生活習慣を体験したりすることは、直接現地に行かなければできないことであるため、とても良い経験ができたと思う。」(M)

- ・「リスニングの力はついたと思う。1日6時間の中国語の授業のおかげだと思う。」(F)
- ・「私がサマーセミナーに参加したのは、リスニング力を鍛えることが目的でした。土日以外毎日中国語で会話をすることで鍛えられました。私は最初簡単な中国語会話もすることができませんでしたが、毎日話すことでリスニング力が確実に上がり、少し話せるようになりました。」(F)
- ・「半分は得られました。得られたのは聞き取る能力です。その一方で話す能力(スピーキング力)は一ヵ月という短い時間では、まだ思ったように話せるほどにはなりませんでした。この点は継続して練習する必要があると理解しています。」(F)

**Q 6. 何が期待通りではありませんでしたか？それは何故ですか？**

前項ではリスニング力の向上を挙げる者が多かったが、逆に期待通りではなかった点として、中国語での表現力を挙げる者が数名いた(前項の一番最後に紹介した学生も、スピーキング力の伸び悩みを挙げている)。リスニングという“input”に比べて、自分の言葉で話すという“output”は、短期研修だけでは達成しにくい部分ではある。しかし、それは「聞いて(多少なりとも)分かる」からこそその「話せない」もどかしさであり、研修後の継続的な努力を期待したい。

- ・「流暢に中国語を話せるようになることを期待していましたが、あまりうまく話せるようにはなりませんでした。授業と食事の時間の会話で知っている単語と表現が増えたと満足して、自主学習が不十分だったと感じています」(F)
- ・「聞かれたことに答えることはできても、自分から話題を提示したり、話題を広げたりという積極性は足りなかったと思う。知っている表現を用いて言いたいことを言うことはまだ難しいと思った」(F)
- ・「私が中国で期待していたものは語学の向上です。言いたいことを中国語ですぐに言えることを目標に勉強してきました。しかし、中国で生活をしていて「言いたいのに中国語でなんと言うかわからない」ことが多くあり勉強不足だと痛感いたしました。」(M)

**Q 7. 期待通りの中国語力がつきましたか？**

- 1、進歩した      2、まあ進歩した      3、あまり進歩なし      4、全然進歩なし

過去の記録では以下の通り。

2000年度、「進歩した」7名、「まあ進歩した」14名、「あまり進歩なし」3名。

2006年度、「進歩した」3名、「まあ進歩した」11名、「あまり進歩なし」2名。

2010年度、「進歩した」9名、「まあ進歩した」16名。そして、2015年度は、「進歩した」6名、「まあ進歩した」9名であった。「まあ進歩した」という項目を選択するのは

自分の成果に対する謙遜とも取れるため、概ね中国語力に「進歩がみられた」と言える。

Q 7'. もう少し詳しく教えてください。

リスニング力の向上が一番多かったが、「モチベーションが上がった・自信がついた」という回答も見られた。

- ・「さすがに一ヵ月も中国語漬けの生活を送っていたのだから、少しは進歩しただろうと思う。中国に来たばかりの頃は、テレビから流れる中国語もほとんど聞き取れなかったが、次第に、基本的な単語や講義で勉強した文章などが聞き取れるようになってきたことは自分でも実感できた。特にリスニングの力が以前より伸びたと思う。」(M)
- ・「相手の話を完璧に聞き取れるようになったり、流暢に中国語を話せるようになったりはありませんでしたが、知っている単語や表現の量は増えたと感じています。また、サマーセミナーに参加する前よりも発音に気をつけるようになりました。」(F)
- ・「特にリスニング力が上がったと感じる。わかるようになった語彙や表現も増えた。」(F)
- ・「語彙を増やせたことはもちろん、毎日の授業で聞く力も大幅に伸びたと思います。何より現地の人との会話ができたと自信につながっています。」(M)

Q 8. 中国語力が伸びた・伸びなかった理由は何だと思えますか？

伸びた理由としては、学習環境や教員の親身な対応を挙げる者が多かった。伸びなかった理由としては、自分自身の意識付けが弱かったことや、中国に行く前の準備をもっとしていれば、という声が見られた。現地研修に先立ち、日本にいる間にしっかりと発音を定着させておくことは、現地での成果を大きく左右するようである。

Q 9. 日本語禁止も含めて、部屋でもできるだけ中国語を使うよう心がける等、自分で中国語を身につける環境を意識的に作ろうとしましたか？

過去のコメントと同様に「分からなくてもとりあえずテレビはつけていた」(F) や、「友達といる時も辞書を引きながら中国語で会話するように努めた」(F) 等の記載が見られた。

Q 10. 引率教員・助手・スタッフへの評価や要望を一言

引率教員への評価に感謝する次第である。その中で興味深かったコメントを一つ紹介する。(下線部は引用者による)「中国人は中国語が話せない人間にやたら厳しかったので、我々が聞き取れる程度の中国語を話してくれた先生方は少し心の支えになりました。ありがとうございました。」(F)

他方、現地教員から音声データを受け取ったり、自分で中国語を吹き込んだ課題を提出す

際に「We chat」（メッセージ通話アプリ）を利用するケースが多かったが、日本にいる間でなければ登録が出来ないようであるため、出発前の対応が必要である点等は今後の課題である。

**Q 1 1 . 中国語の先生についての評価も聞かせてください**

清華大学の先生方に対して、肯定的・感謝するコメントばかりであった。

- ・「口語の先生は、最初のうちは聞き取りやすいようにゆっくり話して下さったのでとても助かりました。聴力の先生は初めから普通の速さでお話していたので聞き取れずに困ることもありましたが、中国人が話すスピードに慣れることができたのでとてもありがたかったです。」（F）
- ・「教え方もていねいで、分かるまで教えてくれたのでとても親切だった。発音もきれいで聞きとりやすかった。」（F）
- ・「初級班の先生方にも大変お世話になりました。先生方の中国語の講義は中国語に不安があった私にもわかりやすく、聴きやすい講義でした。わからないところは皆がわかるまで真剣に教えてくれました。質問しに行った時も私が理解できるまで教えてくれました。先生方のおかげで中国語のレベルが上がったと感じています。」（M）

**Q 1 2 . 同じ時期に滞在した他のグループと比べてどう思いましたか？**

この設問は、過去に、新潟大学サマセミと同時期に、他大学のサマーセミナーも多数実施されていたことによるが、現在では他のグループを見かけないことが多い。

- ・「清華大学に長期で留学している日本の他大学の方に会ってお話をすると、夕食も皆一緒に食べることを聞いて、放課後の自由が無いし、街を出歩くことも一種の勉強なのにせっかく北京に来ているのに勿体ない、と言われて、その時初めて皆で夕飯を一緒に食べるのが普通でないことに気が付いたが、私は、それを不自由だと思わず、むしろ、沢山に中国語を使う機会に恵まれて良かったと思う。」（F）

**Q 1 3 . その他、書きたいことがあれば。**

サマセミが、今後のステップアップのきっかけになったと思われるコメントが見られた。

- ・「もっと中国について知りたいなと思いました。毎日刺激と驚きの連続でまだまだ知らないことが沢山あるのだろうと思うと、中国はとても興味深い国だと思いました。」（M）
- ・「長期留学のためにこれからも努力を続けるという意味をサマセミは与えてくれました。ぜひ今後も長く続いてほしいです」（M）

第3部 追跡アンケート（全11項目）

この追跡アンケートを行う目的は2点ある。一点目は、語学力の面での効果を見極めるにはある程度の時間を置く必要があること。二点目は、サマセミ終了時の「興奮」が冷めて、ある程度冷静に振り返ったときの評価を調べるためである。

Q1. 新学期が始まって、自分に中国語力がついた実感はありますか？

1. 大いにある 2. まあ感じる 3. あまり感じない 4. ほとんど感じない

2015年度のサマセミに参加した15人のうち、「大いにある」と答えたのが7名、「まあ感じる」が8名であった。「あまり感じない」以下の回答は見られなかった。

Q2. (Q1で1または2と答えた人に) 次の5つの項目について、一番力がついたりと思われる項目から順に1、2、3、4、5の欄に項目名を書き入れて下さい。

参加者からの回答について、各選択肢の合計と、各班の内訳は次の通りである。各項目の数値が5以上のものに囲み線を施す。

	会話	ヒアリング	発音	読解力	作文
1	1	7	3	3	1
2	4	6	3	2	0
3	4	0	5	4	2
4	2	1	4	1	7
5	4	1	0	5	5

学生それぞれのレベルや感じ方に違いはあるだろうが、全般的に、ヒアリング力が向上した実感を持つ者が多いようである。発音や会話が続き、読解力と作文が下位である点は、過去のアンケート調査でも同様の傾向であった。会話や発音の数値にバラつきが見られる点について、聞くことと話すことは表裏一体であるので、ヒアリング力の向上という実感をうまく発音の向上に結びつけられる指導が必要となると言えよう。そして、それに伴って会話力の伸びも期待できると考える。

Q3. (Q1で1または2と答えた人に) どんな時に、どのようにして実力の伸びを感じましたか？簡単に書いて下さい。

1：会話、2：ヒアリング、3：発音、4：読解力、5：作文

- 「会話」能力の向上についての実感
  - ・「ネイティブの先生の質問に答えられたときです。」(F)
  - ・「会話の中で言いたいことが中国語で文にしてすぐに頭に浮かんで、すぐ声に出すことができた、という頻度がふえたとき」(F)
  - ・「中国人留学生と話すとき、サマーセミナーに参加する前よりも会話の内容がわかるようになった」(F)
- 「ヒアリング」能力の向上についての実感
  - ・「中検やHSKの勉強をしても聞き取れる単語の数が格段に増えた」(F)
  - ・「インターネットサイトで中国語のCMを聞き取れたとき」(F)
  - ・「サマーセミナーに参加する前は中国語のみの授業で先生が何を言っているのか全然聞き取れなかったが、今はゆっくり話してもらえればほぼ聞き取れるようになった」(F)
- 「発音」能力の向上についての実感
  - ・「特に声調に関して、サマーセミナーに参加する前はよく注意されていました。まだまだですが最初よりは声調を正確に言えるようになりました。」(M)
  - ・「中国語の授業の時間に、発音が周りとは比べきれいと言われたとき。」(F)
  - ・「聞き返される回数が減ったため、発音はよくなっていていると思う」(F)
- 「読解」能力の向上についての実感
  - ・「文章を前よりすらすら読めるようになった。」(F)
  - ・「初見の文章を読むときでも、大まかな意味内容を取ることができる。」(F)
- 「作文」能力の向上についての実感
  - ・「外書講読の授業で作文する時、知っている単語が増えたので長めの作文をつくることができるようになったからです。」(F)
  - ・「少し文法も憶えて、レポートリーが前より出来た。」(F)
  - ・「簡単な作文であれば以前よりも書けるようになってきた。」(F)

Q 4. 中国語力を落とさないために、特別に何かしていますか？

Q 5. さらに中国語力をつけるために何かしていますか？

書かれたコメントには、次のような学習法が記されていた。授業への出席、留学生との交流会への参加、テレビやラジオの中国語講座の利用、検定試験の勉強、中国語チャットへの参加。新潟大学では中国語を学べる科目が多数開講されており、また4年一貫教育として、継続的に学べる点も特徴であるので、在学中に多くの中国語科目を履修することを学生には勧めている。また「中国語チャット」は中国語圏の留学生がチューターとして会話の相手をするという試みで、大変有意義なものである。

Q 6. 1年以上の留学に関心はありますか？その関心に、サマーセミナーに参加したことで何か変化はありましたか？

サマーセミナーに参加したことで中国や長期留学に対して肯定的なイメージを持った学生が多かった。様々な点で意識の変化が見られる。

- ・「サマーセミナーに参加したことで、中国で具体的にどんな生活をするようになるのか実感できた。サマーセミナー参加後、たった一ヵ月ではあったが、その間に中国で生活することを通して覚えた日常語の量は、サマーセミナーに参加する前に学習した語彙よりもはるかに上回り、現地で生活しながら学ぶことと、机に向かって勉強することではこれほど違いがあることに驚いた。そのため、中国語をより上達するためには長期留学も視野に入れたいと思った。」(F)
- ・「約10ヵ月の留学にはすでに申し込んだ。サマーセミナーは、長期留学の予行演習としてちょうど良いと思う。」(M)
- ・「元々長期留学を志していたが、より強く志すようになった。」(M)

Q 7. サマーセミナーに参加したことで、中国に対する関心や、語学、留学に対する詞性など、何か変わったことがありますか？

Q 8. (Q 7と関連して) それはどのような変化ですか？

Q 9. (Q 7と関連して) どんなときにその変化を感じますか？

Q 7、Q 8、Q 9については、コメントをまとめて紹介する。サマーセミナーを通じて培った能力や自分の中で起こった変化について、冷静に捉えていることがうかがえる。

- ・「自信がついたことで、(中国語会話にもっと)挑戦してみようという意識が生まれた。また、うまくできなかったことも多いので、もっと力をつけたいというモチベーションにもつながった。」(F)
- ・「中国に対する考え方はサマーセミナーに参加して180度変わりました。実際に行ってみないと分からないことは多くあります。日本も見習わないといけないと思う点もいくつかありました。この目で見て中国の経済の成長は凄いものだと思いました。今後、生きていく上で中国語が使われる場面も出てくると思います。そのときの為に勉強していかなければいけないと感じられました。」(M)
- ・「以前よりも、語学習得において留学が非常に重要であると感じるようになった。」(F)
- ・「以前は中国語を学ぶのが楽しいだけでしたが、中国人のことをもっと知りたいと感じるようになりました。」(F)
- ・「帰国してからは、国籍に関係なく人や国に対する偏見を無くすようにしている。語学留学はお金がかかるし、そこまでしなくてもいいのではないかと思っていたが、世界の情勢

や思想についても知れるいい機会だと今は思っている。」(F)

- ・「以前から中国人や中国の社会について関心はあったが、表面上のことだけではなく、より深くという変化。」(F)
- ・「ニュースで中国の話題が出たときに以前よりも関心を持って見ていると感じます。また、そのニュースの中で中国語を話している場面があったときは、聞き取れる単語があるか気にしながら見るようになりました。」(F)
- ・「中国に関するニュース報道を見て、一面的ではなく多角的に考えるようになった。」(M)

**Q10. 費用、単位など余計なものを無視して考えてみて、もう一度サマーセミナーに参加してみたいと思いますか？**

15名のうち、「参加したい」と答えたのは14名。1名は「長期留学をするので必要を感じない」という発展的な回答であった。

**Q11. その他、何か書きたいことがあったらどうぞ！！**

- ・留学を考えるだけでなく、自分の人生を自分の頭で考えることができるようになった。たった一ヵ月間であったが、得るものは大きかったし、時がたつにつれて、サマセミはとも充実していたことを実感し、先生やメンバーへの感謝が大きくなった。(F)
- ・留学は短期でも得るものがあるので絶対行って損はないと思いました！(F)

## むすび

本稿は、2015年度に実施された中国サマーセミナーに参加した学生へのアンケートについて考察を行ったものであり、サマセミが始まって以来、4篇目のアンケートまとめとなる。はじめに挙げた学習面での三つの特徴は、この22年間、一貫してこのサマセミで受け継がれてきた、本研修プログラムを象徴するものである。それは2010年度以降、ゼロビギナーの参加を認めるようになってからも変わらずに学生の意識を高める役割を担っている。2015年度を含め、これまでに参加した全ての学生が「中国語のレベルを上げたい」という高い意欲を持って臨み、そして、トラブル無く研修を終え、現在までやってこられたのは、引率者にとって何よりありがたいことである。

最後に、次回の定点観測時に振り返るための課題を記してむすびとしたい。今回のサマーセミナーでは、学生が現地での中国語学習をすすめる上でのある課題が浮き彫りとなった。「事後アンケート」のQ4やQ10でも言及したが、現地で使用する教科書の音声、参加学生がそれぞれいつでも自由に聞けるという環境を確保することが難しかったことである。一昔前であれば、教科書の付録はカセットテープであり、携帯式カセットプレーヤーを現地調達することで解決をみた。付録がCDになっても、廉価のCDプレーヤーを“超市”で買っ

たり、パソコンを持参している学生に手伝ってもらったりして解決することが出来た。しかし、時代は変わり、デジタル化の波はこんなところにも影響を与え、今や教科書の付録CDはmp3形式が主流となり、一般のCDプレーヤーでは聞くことが出来ず、また、そもそも通常のCDプレーヤー自体が売られておらずなかなか手に入らないという状況であった。また、清華大学の先生方が教科書の音声データを学生らに配付しようとして「We chat」を利用しようにも、学生らはアカウントが無いので受け取れない、という事態も発生した。今回は結局、パソコンを持参していた学生の協力や、現地でかろうじて購入できたCDプレーヤーを共有するなどしてしのぐという「解決」となった。

言うまでもなく、語学において模範音声は不可欠なものである。もしも、授業外で教科書の音声は全く聞くことが出来ないという外国語学習では、その成果は期待していたものより低くなってしまふ可能性が高い。今回の一件で、十分に準備をして現地入りしても、前回までは問題なかったことが、急に問題となり、簡単に足元をすくわれてしまうという思いを経験した。日進月歩の中国においてそれは日常茶飯事であろうが、メディアの革新により、今後こうした状況は起こりうると思われる。参加学生の意欲に応え、最大の学習成果を上げられるようにするべく、現地情報の把握に努め、学習環境の整備を適切に行っていく必要性を改めて考えさせられた次第である。

(注1) サマースクールおよびサマーセミナーについての、これまでの詳細は過去のアンケート報告を参照されたい。本稿はこれまでの3篇の報告書(真水2001、阿波村ら2007、干野ら2011)を踏襲するものである。

(注2) 本稿ではアンケート集計に主眼を置いておりプログラム自体の説明は大幅に割愛している。清華大学サマーセミナーの実施状況についての詳細は、藤田益子ら2011を参照されたい。

## 参考文献

真水康樹2001 「中国サマーセミナーの成果と可能性に関する一考察—新潟大学法学部2000年度 清華大学サマースクール アンケート調査 報告書—」、『新潟大学留学生センター紀要』第3号、2001年3月。

阿波村稔・真水康樹・藤田益子2007 「中国サマーセミナーの成果と可能性に関する一考察—2006年度 清華大学サマーセミナーアンケート調査 報告書—」、『新潟大学国際センター紀要』第3号、2007年3月。

干野真一・真水康樹・藤田益子2011 「中国サマーセミナーの成果と可能性についての一考察—2010年度 新潟大学清華大学サマーセミナーアンケート調査報告書—」、『新潟大学国際センター紀要』第7号、2011年3月。

藤田益子・干野真一・櫛谷圭司・真水康樹共編『清華大学サマーセミナー報告書1994—2010 17年間の実績』、新潟大学国際センター、2011年3月。